中国西安の観光と政治性

松　田　　徹

はじめに

2012 年 8 月 21 日から 25 日にかけて、中国の古都西安を訪れた[1]。いうまでもなく、西安は中国六大古都の一つであり、観光資源として膨大な数の史跡に恵まれている。特に近年は中国国内も観光ブームとあって、その観光都市としての特色は一層顕著なものになって来ている[2]。

ところで、一般的に観光の意義ないし役割というものは、以下のように理解されている[3]。

1．異文化理解と国際平和の増進
2．国民経済の発展
3．地域の活性化
4．国民生活の安定向上

しかしながら、中国における観光は、これらと異なる要素を多分に含んでいるように思われる。「愛国主義」が喧伝される現下の中国において、新しい時代の新たな政治プロパガンダとみなされる「紅色旅游」(赤色観光・革命聖地巡礼）が大きくクローズアップされている[4]。このことは、中国における観光の特殊性を示している。

したがって、今回の調査にあたっては、兵馬俑や秦始皇帝陵などのオーソドックスな史跡のほか、西安事変関連の史跡なども巡りながら、それらの史跡ないしは観光スポットとしての見せ方に着目していった。以下、史跡ごとに検証していきたい[5]。

一、現代史関係史跡

西安で最も「愛国主義教育」の匂いを感じ取ることができるのは、なんといっても、1936 年 12 月に起こった西安事変関係[6] の史跡だろう。見学した順に記すことにする。

・華清池（五間廳および兵諫亭）

かの楊貴妃が温泉に浸かったことで有名なこの史跡は、近代以前の西安が持つ「大唐の都」というイメージを彷彿させるだけでなく、現代史の重要な舞台でもある。西安事変勃発当時、蔣介石は華清池に滞在し、「五間廳」を宿舎兼執務室としていた。驪山を背にした場所に建つ「五間廳」見学順路入口に、先ず高々と「愛国主義教育基地」というプレートが掲げてあり（写真１）、西安事変の概要説明板が続く。室内はガラス越しで見られるだけだが、襲撃時の銃撃によって割れた窓や、弾痕も残っていた。

襲撃を受けた蔣介石は、裏手の驪山へ倉皇として脱出をはかるが、岩屋に潜んでいるところを捉えられてしまう。蔣が捉えられた場所も有名な史跡で、かつては、直截的な「捉蔣亭」と称されていたが、現在は「兵諫亭」と名を改めている。ここに至るには、華清池（入場料 110 元）とは、別に驪山観光地区への入場料 70 元が必要であった。

山道を登ったところの売店横に、西安事変の映画『驪山銃声』のポスターが貼ってある。なんとそこでは、映画の DVD（30 元）を購入すると、蔣介石を演じた俳優郭智勇氏がサインしてくれた（写真２）。郭氏は蔣介石に扮して軍服を身に纏い、執務室には青天白日旗が掛かっていた。また、観光客が国民党の軍服を着てコスプレ写真（１枚 35 元）も撮ることができるサービスもあった。

兵諫亭へと歩みを進めて行く。「兵諫亭共山河在、愛国主義日月懸」と刻まれた石碑があり、イギリス製の６ポンド砲や鹵獲した日本軍の山砲などが並んでいる先に、西安事変の顛末を描いたレリーフがあった。西安事変の主役、張学良と楊虎城を描いたレリーフは、殊更立派に「千古功臣、民族英雄」との賛辞付きである。

いわゆる兵諫亭の横に蔣介石が捉えられた岩屋があった。観光客がよじ登れるよう鎖が用意されており、登っていた肥満体の少年が、「こんなところに登っていたなんて蔣介石も大したものだ！」と叫んでいた（写真３）。

・西安事変記念館（張学良公館）

事変勃発後、延安から駆け付けた周恩来が張学良らと交渉をした場所であり、周恩来たち中国共産党代表団が宿泊した場所でもある。現在は西安事変記念館として、西安における「紅色旅游」最大の観光スポットである。その証拠に、西安各学校の愛国主義教育基地であることを示すプレートを多数掲げていた（写真４）。

このような、社会主義関係の「紅色旅游」観光スポットは、参観費無料の場所が多い。ここも身分証明書を提示すれば、入場できる。ただし、ラフな服装やサンダル履きは参観お断り、と注意書してあった。

入口に大きな石の説明板には、市内に点在する西安事変関連史跡の配置が図図示されているが、名前のみで現在未公開の場所も載っている（写真５）。

歴史紹介の展示は、写真パネルや張学良の遺品など、かなり詳細かつ適切に配列してあり見ごたえがあった。ちょうど高校生の団体が見学中で、指示棒を手にした女性解説員の詳しい説明に聞き入っていた。この解説員の女性は、同記念館専属で、長い説明文をすべて諳んじていたのには驚かされた。感情を込めた（「この民族の危機に際して～」といった調子）流暢な節回しが妙に印象的であった（写真６）。その様子をビデオクルーが撮影していた。学校行事を記録しているのだろう。

事変当時使われた室内は、装飾もすべて復元したうえで、歴史上の人物の蝋人形を配置している（写真７）。長春の末代皇帝溥儀の宮殿（いわゆる「偽宮博物館」）などと共通する展示法である。この場所が本来は張学良の公館であったことから、張学良個人の事績を解説展示してある。張学良の胸像（晩年の姿）の台座には、「赤誠愛国無悔情」(誠実に国を愛し悔いることなし）と、極めて好意的な賛辞が刻まれている。

西安事変そのものについては、「歴史的転折」と位置付け、「西安事変の平和的解決は時局の転換の枢要となった。新たな形勢の下、国共合作がなされ、全国的な抗日戦争が発動された」という総括がされていた（写真８）。

・楊虎城記念館（止園）

かつては、「止園」という風雅な名前をもつ楊虎城の別邸であった。見学は無料。張学良記念館と同一デザインの説明板があり、西安事変関連史跡の市内配置図も全く同様であった（写真９）。係員の女性の話では、他の施設、西宮招待所、高桂滋公館などは修復が終わっていなく、目下非公開だそうである。やがては公開する予定で、前もって図示しているようだ。

本館の内部に楊虎城関係の展示物が陳列されている。地方軍閥としての楊虎城の出自からすると、手放しで英雄視もできないはずだが、青年時から革命を志していたかのような賞賛のしかたである（写真 10）。この後、訪れた革命公園内の楊虎城彫像は、堂々たる容貌体躯であった（写真 11）。まさに、西安事変の片方の主役として、革命烈士の一人なのだ[7]。

・八路軍西安弁事処記念館

ここも入場は無料。入口に、この記念館を「愛国主義教育基地」と認定している学校等の一覧が表示されている。順路に沿って見て行くと、ヘレン・フォスター・スノー（『中国の赤い星』の著者　エドガー・スノー夫人）の紹介・展示が目を引いた（写真 12）。

しかし、満州事変以降の各時代に区分して共産党の活動を紹介した展示物には、少々辟易させられた。改革開放政策以降現代までの流れでとらえさせようという意図が明白であった（写真 13）。

また、この場所は、国共合作後、延安に拠点を持つ八路軍の出先連絡機関として宣伝活動の拠点であったため、現在も中国共産党の教育活動や党関係の結団式などを行えるようになっている。

二、兵馬俑などの史跡

半坡遺跡、兵馬俑、華清池など、西安を訪れた観光客必見の観光スポットは、市内の東および東郊に多い。これらを効率よく回るため、タクシーを一日 300 元でチャーターした。

・半坡遺跡

1961 年より全国重点文物保護単位となっていて、約 6000 年前の仰韶文化の集落跡と共同墓地を見学できる。入場料は 65 元と意外に高いが、多くの観光客で賑わっていた。巨大な体育館のような建物が遺跡全体を覆っている。

別棟の展示ホールには、有名な「人面魚紋」の土器をはじめ、原始生活の様子を描いた等身大のレプリカなどが展示してある。照明に工夫を凝らすなど、いたるところに斬新な試みが見られた。

また、展示ホールの入口には、

民知其母、不知其父（民その母を知るも、その父を知らず）

『荘子』雑篇第 29 盗跖

日出而作、日落而息（日出て作り、日落ちて息む）

『荘子』雑篇第 28 譲王

という、古代の母系制社会と生活を描いた『荘子』の一節が英訳とともにデザインされ、その前で中国人カップルが記念撮影していた（写真 14）。

その他、敷地内には、先史時代の集落をイメージしたレストランなどもあり、多くの観光客を呼び込むような配慮がなされていた。

・秦始皇帝陵博物院（兵馬俑博物館・始皇帝陵墓）

西安観光の最大のメッカは、なんといっても世界遺産である兵馬俑博物館であろう。現在は秦始皇帝陵博物院として、兵馬俑、始皇帝陵を合わせて見学できるようになっている。チケット代は 150 元で、タクシー代と比較しても大変高価である。

その入口には始皇帝彫像が屹立しており、始皇帝の偉大さを強烈にアピールしている（写真 15）。彫像の前に銅車馬の粗末なレプリカが鎮座していて、撮影代を払えば記念撮影料を許可するという商魂のたくましさに苦笑。

以前に比べ、敷地も広大なものに変貌し、いまや一大歴史テーマパークの感がある。肝心の兵馬俑坑まで延々と歩かされる（有料のカートも

あり)。すっかり観光地化されたせいで店が立ち並び、マジックミラーハウスのような始皇帝や兵馬俑と無縁の展示物も見られた。

兵馬俑坑の外観自体は変わらず、巨大な体育館のような建築が発掘坑全体を覆っている。かつては館内撮影禁止だったが、いまは自由である。1974 年に付近の農民が兵馬俑を発見した地点等の説明案内板も整備されていた。

別棟の陳列ホールでは「秦と北方民族」という特別展が開催されており、展示方法や説明もなかなかのレベルに達していた。「萌芽・成長・融合」という展示のテーマは、秦史になぞらえながら現代の民族政策が反映されているような文言であった（写真 16)。

・華清池

ここも人気スポットとあって入場料は 110 元と高い。楊貴妃が入った風呂などの遺跡、および上述した西安事変の舞台「五間聴」がある。25 年前初めてここを訪れた時は、田舎の公園のような雰囲気だったが、拡張に拡張を重ね観光地化されて来た。現在も正門の向かい側にホテル等の関連施設を建設中である。ミロのヴィーナスを連想させる楊貴妃像には違和感を覚えた。

・西安城壁

西安市街中心部には、明代の規模を保つ周囲約 12km におよぶ城壁が現存している。40 元払えば、城壁に登ることが出来る。

城壁の上では、単純に景観を楽しむ内外の観光客が多数見られた。レンタサイクル（1 時間 40 元、補償金 100 元）があったので、我々もそれを利用して、長楽門（東門）から永寧門（南門）まで自転車で城壁を移動した。

・碑林博物館

西安は城壁の内側にも多くの観光スポットを抱えている。その中で、碑林博物館は、いわゆる「愛国」とは、あまり縁がない史跡の一つである。

日本人には人気がある観光名所だが、チケット代は 75 元もする。歴代の石碑が沢山収蔵されている。中でも「大秦景教流行中国碑」などは、世界史の教科書に写真が載っているほどだ。いかんせん碑銘はガラスに覆われており、撮影が困難なのが惜しまれる。

まさしく林立する碑の多さに圧倒されたが、ちょうど拓本を採る作業を見学することが出来た（写真 17）。拓本は売店で高価な値がつけられており、ここでは、愛国主義よりも商業主義が勝っているようだった。

碑林博物館の西側は、レトロな街並みの土産物店が連なる。その一角に由緒ありそうな小学校があった。その近くに史跡としてほとんど保護されていない仏塔がポツンと建っていた。西安の史跡は、有名無名を問わず大量にあり、限られた時間の中では、とても見切れるものでないと実感した[8]。

・清真大寺

西安をシルクロードの出発点として、現代中国の少数民族政策の中で、どのように位置づけるかということも、今回の訪問目的の一つであった。しかしながら、今回は時間がなく、市内中心部鼓楼付近のイスラム街とその中の清真大寺（モスク）を訪れるに止まった。

モスクとはいえ、完全に中国式建築である。入場料は 25 元。欧米人の観光客が目立ったが、宗教活動の場でもあり、ちょうど礼拝大殿ではコーランと唱え祈りの時間となった。内部は観光客立ち入り禁止。建物の柱に「愛国愛教」のスローガンが貼ってあり、中国国内イスラム教徒の置かれた複雑な立場を物語っていた（写真 18）。

清真大寺を中心に付近はイスラム街で、イスラム教徒にとって生活の場であると同時に、「シルクロードの出発点」という雰囲気を醸し出す観光スポットとなっている。西安名物「羊肉泡饃」（ナンを千切って入れた碗に、羊肉と春雨と香菜に汁をかけて食す）や羊肉のケバブなど各種イスラム食品が並んでいた（写真 19）。

三、西安近郊の史跡

滞在 4 日目、2 日目に利用したタクシーの運転手と交渉し、西安市から離れた地点を回った。距離があるのでチャーター料金は 600 元となった。

・絲綢之路群彫

市内の東、シルクロードに向かう位置に、シルクロードの起点であることを示すレリーフがラクダの隊商をモチーフにした群像がある。

公園となっており、子供が遊んだり中年男性が凧を揚げていた。石のプレートにシルクロードの地図が刻まれているだけで、特に解説文などはなかった。このような地図にまで、フィリピンなどと係争中の南沙群島が記載されている。余談だが、この地図上には、尖閣諸島（釣魚島）は記載されていなかった（写真 20）。

・楊貴妃墓

西安市内からは 2 時間半を要した。入場料は、なぜか半端な 21 元であった。ここにも「愛国主義教育基地」のプレートが入口に掲げてあった。楊貴妃がどういう文脈で愛国主義と結びつくのかは、いまひとつピンとこなかった。しいていえば、毛沢東手書き長恨歌が彫り込まれていることくらいだろうか（写真 21）。

もう少し観光開発されているかと期待したが、入口付近の道路上に、「楊貴妃墓」という標識はあるものの、売店などもなく、周りは完全な農村地帯であった（写真 22）。このように、西安郊外は、まだ道路も未整備なところが多い。成都までの高速鉄道建設にともなう悪路の中、茂陵および霍去病墓に向った。

・茂陵博物館

茂陵博物館として武帝時代の武将、霍去病の墓が見学できる。チケット代は 46 元で、見学者は極めて少なかった。博物館入口の茂陵（漢の武帝の墓）が遠望できる場所に説明板があった。武帝の事績を讃え、その他漢代の陵墓群の位置関係を示していた（写真 23）。

霍去病墓の入口に「中国公民国内旅游文明行為公約」と「中国公民出境旅游文明行為指南」(写真 24) が大きな文字で示されていた。前者は国内旅行の、後者は海外旅行の際のマナー集である[9]。

・阿房宮遊楽園

西安市内に戻る道すがら、立ち寄ったが、これ自体は史跡ではなく、阿房宮を復元した歴史テーマパークである。テレビドラマ「武聖関公」などのロケ地だったことを示すプレートが正門ゲート前に掲げてあった。始皇帝に関係ない三国時代のドラマでもセットとして流用されているようだ。

おわりに

大畑裕嗣 1996 は、中国の近現代史が日本のそれとは非常に違った特徴を持つことを前提に、「観光対象と観光行動」という、伝統的な歴史研究とは異なった観点から中国近現代史上の重要な場所を扱うことで、今まで述べられているのとは違った中国のモダニティの特徴をとらえようとしたものである。

そして、第一歩として天安門広場をとりあげ、天安門広場が「新中国」の力の構造を中国人に教える空間構造として建設された、と指摘している。そして、「教化」が観光行動のうちに無意識的に組みこまれているとする[10]。

このような視点に立つとき、今夏訪れた西安にあっては、当然「革命の聖地」とみなされる西安事変関連の史跡群に濃厚に愛国主義教育基地としての作用が認められるのは当然の帰結である。

しかし、愛国主義教育基地は近現代の史跡にとどまらない。「偉大な中華民族」という観点からは、秦の始皇帝の「偉大な業績」やシルクロードへの道筋を拓いた漢の武帝も讃えられるべき対象だからである[11]。先に、楊貴妃の墓が愛国主義基地になっていたことに違和感を抱いたと記したが、その辺りの背景は検証の余地があろう。

注：

1　2012 年度麗澤大学経済社会総合センターの共同研究プロジェクト「中国新疆地域をめぐる歴史社会研究」の予算により現地調査を行った。同行した本学外国語学部櫻井良樹教授、プロジェクトリーダーである堤和彦准教授、出張事務をご担当いただいた本学教育研究支援グループ事務担当の鈴木敦子氏に感謝申し上げたい。なお、本稿は、2012 年 12 月 7 日麗澤大学 2 号棟第 3 会議室における同プロジェクト研究発表をもとにしたものである。

2　西安では、約 20 年前から外資系ホテルの建設ラッシュが始まり、あっという間にベッド数は飽和状態となった。しかしながら、当時は観光地としての遺跡・遺物の見せ方や演出はまだまだ手薄である、という指摘もあった。

中央公論社現地取材班「古代中国の歴史を刻む旧都 観光都市として期待される西安 」『中央公論平成 6 年 12 月号臨時増刊（中国ビジネス 総点検)』1994 年 12 月第 109 巻 14 号 p.497-500 参照。

3　溝尾良隆編『観光学の基礎（観光学全集第 1 巻)』原書房 2009 年 11 月 p.3 ～10　参照。

4　「紅色旅游」とは、中国共産党の歴史上、著名な地点・史跡を観光地として開放し、一般客を招致する観光形態である。2004 年 12 月、中国共産党中央弁公庁と国務院弁公庁は「2004―2010 年全国紅色旅游発展計画綱要」という通達を発表した。

主要な観光スポットとしては、毛沢東、鄧小平等指導者の生家や旧居、井崗山、遵義、延安等の革命拠点などがあげられる。その他、天安門広場や中南海等も建国後の共産党中央の活動拠点として、「紅色旅游」の名所となっている。また、最近では北京や南京、瀋陽など各地に乱立？する抗日戦争記念館や戦闘激戦地も「紅色旅游」の目的地となることが多いという。

政治的には、革命聖地巡礼によって国民の愛国心と党への求心力を高め、経済的には、観光スポットが設置された地域を潤そうというもくろみである。

張恩華「中国の「紅色旅遊」―共産主義から消費主義へ、革命から余暇へ―」『中国 21』(愛知大学現代中国学会編）Vol.29　2008 年 3 月参照。

なお、愛国主義教育については、

岡村志嘉子「中国の愛国主義教育に関する諸規定」『レファレンス』2004 年 12

月
武小燕「1980年代の中国における愛国主義教育政策」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第53巻1号2006年参照。

5　主な訪問史跡と日程は以下の通りである。

8月21日（火）

成田出発、上海からの国内線が遅れた上に、途中悪天候で引き返したりしたため西安到着は深夜となる。

8月22日（水）

半坡遺跡、兵馬俑博物館・始皇帝陵、華清池・驪山（兵諫亭：旧称捉蔣亭）

8月23日（木）

西安事変記念館（張学良公館）、城壁、楊虎城記念館（止園）、革命公園（楊虎城記念碑・彫像）、八路軍西安弁事処記念館

8月24日（金）

絲綢之路群彫、楊貴妃墓、茂陵・霍去病墓、阿房宮遊楽園、碑林博物館、清真大寺・イスラム街

8月25日（土）

西安出発、上海経由で帰国　成田着

6　西安事変に関しては

岸田五郎『張学良はなぜ西安事変に走ったか―東アジアを揺るがした二週間―』（中公新書1246）中央公論社1995年5月

NHK取材班・臼井勝美『張学良の昭和史最後の証言』（角川文庫）角川書店1995年5月

張學良口述　唐徳剛著『張學良口述歴史』（唐徳剛作品集）遠流（台北）2009年3月参照。

7　長寿を全うした張学良と対照的に、楊虎城は、国民党特務機関の手によって惨殺されている。彼のように劇的な死を遂げた人物は、革命烈士・民族英雄・人民英雄として祀られ、孫文や周恩来などの偉人の彫像とスタイルも異なる点があるのだという。

高山陽子「社会主義リアリズムの系譜 ―近代中国におけるモニュメントを中心に―」『亜細亜大学国際関係紀要』第18巻1・2合併号 2009年3月 p.124～

126 参照。

8　本文中細かく記したように、秦始皇帝陵博物院や華清池や兵馬俑博物館などの入場料は、全般的に高い。人気スポットほど値段が高くなる傾向にある。一方、西安事変関連史跡は、入場が無料にもかかわらず、どこも見学者が少なかった（華清池や驪山の兵諫亭は、楊貴妃の温泉や自然景観区に含まれているので、別格だろう）。単なるパネル解説だけでなく、復元した調度品に蝋人形を配置するなど、見学者に配慮した努力も垣間見られたが、教育活動などで動員されないと足が向かないのかもしれない。張学良記念館でこそ高校生の団体と遭遇したが、他の施設は人影もまばらで「笛吹けど踊らず」という状態あった。やはり、社会主義的、教条的なものは敬遠されてしまうのだろう。

9　「中国公民出境旅游文明行為指南」は、以下のようなテンポのよいリズムで覚えやすく作られている。中国人観光客の海外での悪評を、当局が気にしているのでは、と勘繰ってしまう内容である。

中国公民，出境旅游；注意礼儀，保持尊厳。
講究衛生，愛護環境；衣着得体，請勿喧嘩。
尊老愛幼，助人為楽；女子優先，礼貌謙譲。
出行弁事，遵守時間；排隊有序，不超黄線。
文明住宿，不損用品；安静用餐，請勿浪費。
健康娯楽，有益身心；賭博色情，堅決拒絶。
参観游覧，遵守規定；習俗禁忌，切勿冒犯。
遇有疑難，咨詢領館；文明出行，一路平安。

10　大畑裕嗣「天安門広場の空間政治学―観光を通じてみる中国のモダニティ(1)―」『流通経済大学社会学部論叢』第7巻1号 1996 年 10 月参照。

11　例えば、今回入手した茂陵のパンフレットの日本語序文には、以下のような記述がみられる。おかしな日本語だが、そのまま引用する。

中国人民の偉大な指導者、詩詞大家である毛沢東は 1935 年 10 月紅軍を率いて長征して陝西省北部に到着した際、1936 年２月に著名な詩作『泌園春雪』を書かれた。その詞の中に無数英雄を引く時まず秦皇漢武、文才を略輸すと言われた。ここから見ると、毛主席も秦の始皇帝と漢の武帝が中国歴史上で

肩を並べて進む英雄人物だと思われている。

アメリカの前国務卿キシンジヤ博士は1985年11月西安に来て、かれは秦の始皇帝の兵馬俑博物館を見学したあと、また漢の武帝の茂陵博物館を見学して、熱情込めた書置の中に感謝します。私に見せたのは中国の偉大な歴史を展現したもう一つの展覧室であります。と賛美された。

（王志傑『茂陵与霍去病墓石雕』三秦出版社 2005年9月 p.6）



写真１「愛国主義教育基地」の表示



写真２　映画で蔣介石役を演じた俳優

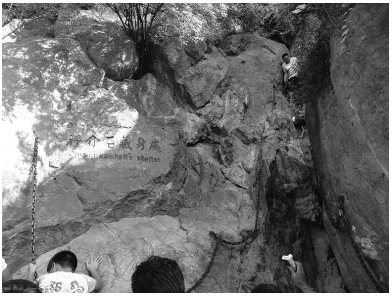


写真３　蔣介石が捉えられた岩屋



写真４　西安各学校のプレート

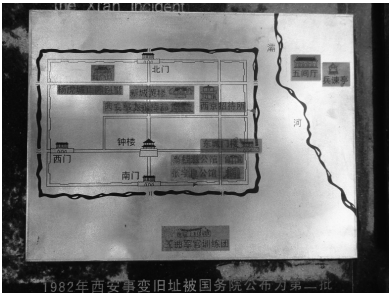


写真５　西安事変関連史跡の市内配置図



写真６　見学中の高校生たちと解説員の女性



写真７　調度品を復元し蝋人形を配置して展示



写真８　「歴史の転換点」とする総括



写真９　事変関連施設共通デザインの説明板



写真 10　楊虎城に対するやや過剰な評価



写真 11　革命公園内の楊虎城彫像



写真 12　スノー夫人の展示

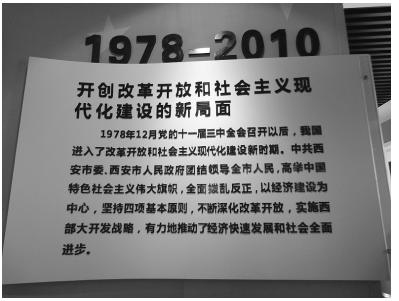


写真 13　現代に至る共産党の活動を紹介



写真 14　『荘子』の一節を背景に撮影記念



写真 15　秦の始皇帝の偉大さをシンボライズ



写真 16　展示のテーマ：萌芽・成長・融合



写真 17　拓本を採る作業（碑林博物館）



写真 18　清真大寺の礼拝大殿にも「愛国…」



写真 19　イスラム料理は西安の名物



写真 20　シルクロードを示す地図



写真 21　毛沢東の手になる長恨歌



写真 22　楊貴妃墓付近は完全な農村地帯



写真 23　茂陵とその説明板



写真 24　中国人が海外で守るべきマナー集